



# Humanity & Nature Newsletter

No.39

November 2012

地球研ニュース



朝の5時半、飼い主の掛け声で集まってきた何十頭もの家畜のなかから、授乳期の個体を識別して、一頭ずつ搾乳する。インド、アルナーチャル・プラデーシュ州北西部、標高3,500mの放牧地にて(撮影:小坂康之)

## 今号の 内容

P2

特集1●国際コモンズ学会に向けて(2)  
研究成果はだれのものか

電子化、ネット化時代の学術情報発信から  
コモンズについて考える

山下幸侍×阿部健一

P5

■ イベントの報告

日文研・地球研合同シンポジウム

現代において可能な分かち合いの方途を探る

鞍田 崇

P6

特集2●フォーラムの検証

第11回地球研フォーラム「つながり」を創る

専門の枠を超えた

協働がもたらす豊かな可能性

縄田浩志+鞍田 崇+石山 俊+  
加藤久明+辻田祐子

P8

■ 百聞一見——フィールドからの体験レポート

モンゴルの大草原で森林の大切さを考える

幸田良介

インド北東部におけるタケ(メロカンナ)の  
一斉開花と関連の諸施策

野瀬光弘

P10

特集3●プロジェクトリーダーに迫る!

砂漠化と貧困への

実効あるアプローチをめざして

田中 樹×加藤裕美

P12

■ 前略 地球研殿——関係者からの応援メッセージ  
遠きにありて思うもの

遠藤崇浩

P13

■ 所員紹介——私の考える地球環境問題と未来  
バーチャルアースによる国土管理

——地図と対策とくらし

矢尾田清幸

P14

■ お知らせ

## 研究成果はだれのものか

## 電子化、ネット化時代の学術情報発信からコモンズについて考える

話し手●山下幸侍(シュプリングァー・ジャパン社長)×聞き手●阿部健一(地球研教授)

編集●編集室

「国際コモンズ学会に向けて」の第2回は学術情報をめぐる話題をおとどけます。現在、研究成果の公開をめぐるのは、オープン・アクセスや機関リポジトリなど、さまざまな動きが存在し、研究成果はだれのものかが揺らいでいます。地球研英文叢書の版元シュプリングァー・ジャパン社の山下幸侍社長と叢書編集長の阿部健一教授が忌憚なく語り合いました。

阿部●オフィスに間仕切りの壁がほとんどないですね。地球研も、ほぼ同じように壁のないかたちです。ただし、ここと違って、もっとにぎやか。(笑)

山下●シュプリングァー\*1でも、情報共有のために……。みんながアイデアを出さなければと、世界各地の事務所はみんな、こんなふうには壁をなくしています。

阿部●世界の、とおっしゃられましたか、各地に関連会社があるんですね。

山下●世界20か国に会社を展開しています。ドイツのハイデルベルクが出版拠点で、その次がニューヨークとロンドン。日本も大きいほうです。

阿部●中国はどうですか。

山下●グループとしては中国にかなり投資していますが、日本のほうが大きい。

阿部●御社のドイツの方とご一緒したとき、「アジアからの発信が必要だ」と指摘され、肝に銘じたことがあります。

山下●最初は、ジャーナル刊行に関するご相談でしたね。

## 電子書籍化で需要に対応

阿部●ええ。しかしわれわれの規模ではジャーナルはちょっと難しい。書籍のほうがよいと始めたのが、第2巻まで出ている地球研英文叢書「Global Environmental Studies」。しかし、シュプリングァーさんから出すことにいちばん反対したのは、じつは私です。

山下●そうなのですか。(笑)

阿部●「商業系の学術出版だと、値段が高すぎる」と。私はこれまで英語の本を3冊

地球研英文叢書 Global Environmental Studies

*Island Futures:  
Conservation and Development Across the Asia-Pacific Region*  
Godfrey Baldacchino, Daniel Niles 編 2011年6月

*The Dilemma of Boundaries: Toward a New Concept of Catchment*  
Makoto Taniguchi, Takayuki Shiraiwa 編 2012年5月

*Building Resilience to Tsunami in Coastal Asia:  
Lessons from the Indian Ocean Tsunami*  
Chieko Umetsu, Takashi Kume, K. Palanisami 編 2013年刊行予定



編みましたが、その一つをオランダのシュプリングァーから出したところ、薄い本なのに150ユーロ。「いったいだれが買うのか」と驚いた。地球研はとくに途上国の研究者をカウンターパートとしている。そういう人たちの手に簡単に入る値段ではないと、反対したのです。

山下●一つの理由は、シュプリングァー社では書籍の価格を、機関購入を前提に設定しているからです。グループ全体で年間約7,000点新刊を出していますが、どれもかなり高度で専門的な研究成果ですから部数は限られています。けれど、研究には必要。ですから、購買者は機関になる。そのバランスで、どうしても高くなりがちです。

学術出版物だと、専門性の高いものは、マーケットが小さいために出版できなかつたり、自費出版になります。じつはシュプリングァーもジャーナルでは収益が出ていましたが、書籍では難しかった。ビジネスモデルを変化させる必要があり、5年ほどかけて一切在庫を持たない電子書籍化とオン・デマンド印刷システムの開発をすすめ、注文があった分だけを印刷することができるようになりました。これが強みになっていますが、単価はどうしても高くなりますね。

阿部●なるほど。出版業界は急速に変わっていますね。

山下●シュプリングァーの年間7,000点の新刊のかなりの数はオン・デマンド印刷対応です。いわゆる初刷りがありません。

阿部●かつてのオン・デマンド印刷の印象

はよくなかったのですが、最近は違いますね。若い所員ができあがった本を見て驚いていました。

## 「知の編集」は研究者の役割

阿部●われわれの総合地球環境学では、広い範囲の専門家、行政の人や教育現場で環境を扱っている人などに発信したい希望があります。さらに、そういう人たちも巻き込んでいく方法も考えている。シュプリングァーさんでは、どうですか。

山下●たとえば、インターネットで電子書籍を販売する場合に、個人の方が購入できるアマゾンやアップルなどのチャンネルを利用する。価格を多少調整することも試験的に始めています。

もう一つは、チャプター単位の販売。特定の章だけ読みたい方に、一部の章だけを安く提供できないかと。

阿部●途上国向けはどうでしょうか。

山下●電子書籍という枠ならば、途上国といわれている国の政府のほうがパッケージでの購入に積極的です。

阿部●書籍の位置づけが変わりつつあるなかで、われわれがジャーナルよりも書籍を優先した理由の一つは、自分の専門から少し離れて情報を得ることが重要だと考えたからです。若い研究者を見ると、英文ジャーナルをピンポイントで検索して、研究している。かつては、図書室で新刊の学術雑誌をパラパラ読んでいて、おやっと思う論文が目にとまるといった楽しい出会いがあった。

多分野の研究者が一つの課題に向けて

\*1 Springer Science+Business Mediaは1842年、ドイツのベルリンで創業された国際科学出版社。本社はベルリン、ハイデルベルク(独)、ドルトレヒト(オランダ)にあり、世界に出版拠点を置く



シュプリンガー・ジャパン  
本社オフィス

研究を進めている地球研では、研究の全体をまとめて出すことが大事になる。すると、ジャーナルよりも書籍の形式がよいのではないかと。しかし、一般的には書籍は数の上で減っているのですね。

山下●そうですね。

阿部●シュプリンガー社も専門分野のニッチを細分化させていますね。1冊に多様な内容を詰め込んだ本、分野を横断するような本はなかなか売れない。

山下●ただ、オンラインだと、逆にそういう本はつくりやすくなります。いくつかの書籍から共通したテーマを仮想パッケージにできますし、そのために書いていただくこともできますから。

阿部●その際、書籍のチャプターや見出しから共通の課題を取り出すには「知の編集力」が必要になるでしょう。この「編集」ということは、ますます必要となる気がするのです。地球研としては、そういう編集を加えた統合力の高い情報を研究成果として見せたい。

いま準備中の3冊め、津波のレジリアンスに関する英文叢書も、ただ論文が並んでいるのではなくて、きちんと統合、シンセサイズしたものになりたいと思っています。

最初の読者としてコメントをいただける編集者がほしいが、これだけ分野を拡げると難しいかな。

山下●多岐にわたる専門分野を一人でというのは難しいですね。シュプリンガーができるのは、研究者コミュニティのなかでそういうことのできる方を探す役割だけです。

## 書籍からデータベースへ

阿部●山下さんはずいぶんお若いですが、どういうご経歴ですか。

山下●シュプリンガーに入社して4年め

あべ・けんいち  
専門は環境人類学、相関地域研究。研究推進戦略センター|成果公開・広報部門長。二〇〇八年から地球研に在籍。



やました・こうじ  
シュプリンガー・ジャパン株式会社代表取締役社長。二〇一一年より現職。



で、その前はアメリカのデータベースの会社にいました。学位論文なども出版している会社ですが、どちらかというとインターネットやデータベース系です。ですから、編集というよりもビジネスモデルのほうから入ってきました。

阿部●私などがイメージする本づくりとは、ちょっと違う感じですね。

山下●完全に違います。データベースとして考えて、そこにどんなコンテンツを集めるか。それが、出版社の仕事です。

編集は専門家に任せて、ビジネスとして動かすことを会社は考える。

阿部●出版社の未来はデータベースづくりにあるのですか。

山下●すでにそうなっていて、大手はそちらにシフトしています。出版社という定義自体が揺れている。

阿部●そういう視点からすると、書籍と雑誌とはどう区分けするのですか。

山下●社内ではコンテンツとして見ますから、区別はありません。ジャーナルというパッケージにするのか、書籍のパッケージにするのか。社内では、スライス・アンド・ダイス(賽の目に刻む)とよく言います。どう切り分けて求められているかたちで提供するのかですね。

## 情報の増大で市場原理も変化する

阿部●少し、学術情報と市場原理についてお聞きしたいと思います。一つは、学術ジャーナルの価格の高騰の問題。私たちは国から資金をいただいて調査・研究して論文を書いているが、へたすると自分の書いた論文を高い費用を出して読まなければいけない現実もありうる。出版社がそれで儲けているとは思いますが、どうして、という思いはある。また、オープン・アクセス\*2雑誌では、購読者がお金を払うのではなくて、執筆した研究者がお金を払う動きも進んでいる。いま変動期だと思えますが、どうお考えですか。

山下●学術情報のオープン・アクセスは出版社の意義に関わることでありますが、シュプリンガーとしては歓迎しています。従来の出版をベースにしたモデルですが、中立的に場を提供し、情報流通のお手伝いをするのであれば、どんなモデルでもよいと考えています。

阿部●コストをどちらが払うにしろ、出版社はその仲立ちという立場ですか。

山下●そうですね。世界の研究開発費はどんどん伸びています。中国などは二桁で伸びていて、比例して研究者も、論文や書籍も増え、出版コストもやはり増える。情報が爆発的に増えるなかで、バランスが崩れてきています。

私たちが思うには、研究開発費が増え、論文も増えるのであれば、支払いモデル、ビジネスモデルの枠組みを変えないと立ちゆかなくなるのではないかと。

情報は研究に必要なものです。すると、その情報にアクセスする枠組みをどうするかは、やはり全体的に考えないといけない。出版社の担う役割は基本的には変わりませんが、モデルは、みんなで協力して作らないといけないと思います。

## 論文は商品?

阿部●税金で行なった研究成果の提供を国民に平等にとると、オープン・アクセスという考えになる。資源管理の場合だと「みんなのものだから、みんなできちっと管理するほうがいい」という、コモングの研究によってエリノア・オストロム教授がノーベル経済学賞を2009年に受賞しましたが、情報の場合はどうなるのかという難しい問いもある。

山下●最近では、グーグルが蓄積した個人のアクセス履歴情報はだれのものかと議論になっていますね。

こと学術出版に関しては、私どもの対価は高いと思われるかもしれませんが、やはりサービスの価値で見ていただくしかないと思っています。シュプリンガー

\*2 学術情報、とりわけ学術雑誌に掲載された論文を電子化してインターネットを通じてだれでも見ることができるようになる運動。1990年代から国際的に動きが開始し、2000年代から加速している

研究成果はだれのものか

電子化、ネット化時代の学術情報発信からコモンズについて考える



公器としての  
企業の役割

は、けっして絶版にはしません。ずっと検索対象になって、読みたい人に読んでもらえる。印刷でしか出ていない本だと、売れなければ1年で書棚から消えてしまいますが、電子化してきちっと流通網に載せることで、ずっとアクセスしてもらえます。このビジビリティやファインダビリティ、つまりだれかの目に触れたり、見つけてもらったりできるようになっている点は大きいのでは、と思うのですが。

阿部●われわれもずっと読んでもらいたいという思いはある。すると、そういうニーズにどこが責任ある対処をするかです。山下●国や学会がするケースもあると思いますが、シュプリンガーのような民間の会社のいちばんの利点は、フェアだということ。思想や政治的な関与がない。公平性の意味では民間がいちばんです。阿部●わかります。一般の商品だと、どこかの企業が製造し、それにかかるコストを価格に反映させる。ただ、いっぽうで、研究成果の流通は、民間にはなじまない気もずっとしている。論文は商品なのかということですが……。

山下●難しいですね。いまシュプリンガーにはシュプリンガー・リンクというサービスがあって、これは中のコンテンツを商品として売っているのではなくて、あくまでサービスを提供して対価をいただいています。本であれば、本という商品を売っていることになりませんが……。

阿部●なるほど、出版社も商品という感覚はだんだんなくなっている……。

山下●そうです、曖昧になった面はある。

見応えある  
ディスプレイを整える

阿部●ネットで得られる情報はタダという意識はどうしてもあるが、技術開発の費用などのコストはかかっている。これをだれが負担するかの問題もありますね。

山下●政府によるいちばんの成功例は、アメリカのNIH(National Institutes of Health)

のPubMed Central。政府が助成した成果論文を集めて、いわゆるリポジトリのかたちで無料公開している。当時のアル・ゴア副大統領が旗振り役をしたので、かなりの金額が投じられました。しかし、こういうものが継続するかどうかは政府の判断や財政状況によります。民間の出版社もつぶれてしまえば同じですが、出版社は需要がある限りこれに対応するモデルを考えますからね。

阿部●じつは、地球研も今年から機関リポジトリ\*3の予算がつかしました。しかし、なにを、どうできるのか、まだ模索中です。

山下●機関リポジトリが注目されてきたのはこの5、6年ですね。リポジトリの方向性は二つあると思います。一つは研究機関が社会貢献の一環で情報発信するショーケースとして。ただ、これはホームページでもできます。いっぽう、蓄積された大量の研究データや古い書物をデジタル化して一般に公開すること、さらに、研究成果、論文を載せようという方向もある。これはどちらかという対商業出版という側面が出てきた。

阿部●私もそういう感覚でした。

山下●私としては、ショーケースの意義は大きいと思います。ただ、成果発表の場に関しては、議論が分かれるところで、所属する研究者に義務を課して、その人の成果のすべてを集めるのは難しいでしょう。NIHのPubMed Centralでも、できていない。

阿部●地球研は英文叢書「Global Environmental Studies」を、ある種のショーケースと位置づけています。ただし、有償のショーケース。でも、とりあえずは世界に向けて窓口を開いているショーケースは、シュプリンガーさんから出させていただいているこのシリーズだけなので、それをもっともっと充実させたい。となると、やっぱりシュプリンガーさんのような出版社が必要になる。(笑)

阿部●きょうはずいぶん刺激的でした。「出版物をデータベースとして考える」、そう言われて、頭を殴られたようで、「そうか、データベースか」と。用意した話題をまったく使えなかったのですが、こちらのほうがよっぽどおもしろくて「なるほどなあ」と思いました。

シュプリンガーはたしかに企業で営利を追求していますが、<sup>おおやけ</sup>公の役割を失うと企業としての信頼もなくなる。

最近、企業のトップとお話するとコモンズの考え方をされている方が多いのに気づきます。よい商品を作ることを消費者から任されているから優れた製品を作り、信頼されてもいる。コストは価格に反映して回収するが、意識は「企業は公器」なのだ、と。「なんとか消費させよう」ではなく、「ほんとうに欲しいものを作りましょう」という方向です。シュプリンガーさんも、そうなのでしょうね。

山下●そうですね。書籍の価格が高いとご指摘いただいたのですが、こういう世界になるとなにか適正価格はわからないし、じつさいに定価を払って読んでいる方はそんなにいない。モデルもどんどん変化している。難しいところです。

でも、そこでの適正価格ってなんだという、さきほど言われた安心感やブランド、それに信頼関係なども入ってくるでしょうし、雑誌に載せることの意義も出てくるでしょう。かつてのように紙で出して終わりではなく、出版したあとも、それを維持・流通させるコストなどもずっとかかる。難しいところです。

阿部●いろんなところでそういう問題がありますね。きょうはいろいろ考えさせられたし、楽しませていただきました。

山下●ありがとうございました。

阿部●研究者と出版社の人がともに健全な話ができるような場は必要ですね。

2012年8月9日

東京都千代田区 シュプリンガー・ジャパン本社にて

\*3 学術機関がその機関に集積された情報を電子化し、集積、保存、閲覧可能にすること。オープン・アクセス運動とも連動し2000年代以降、おもに欧米で進んでいるが、背景に、1990年代の学術雑誌数の激減と価格の高騰の問題がある

## 現代において可能な分かち合いの方途を探る

報告者●**鞍田 崇**(地球研特任准教授)

9月14日、国際日本文化研究センター内講堂(日文研ホール)を会場に、日文研・地球研合同シンポジウムが開催された。同じ人間文化研究機構に属し、同じ京都に位置する「姉妹機関」の共同事業として2008年にスタートしたこの企画も、今年で5回め。すっかり定着した感もあり、350名を超える来場があった。

今回のテーマは「文化・環境は誰のもの?」。あらかじめ明示されていたわけではないが、キーワードは「共有」という言葉にあった。

### 当事者をめぐる複雑な事情

中世社会の共同体を比較検証したマルクス・リュッターマン日文研准教授と、「人類の無形文化遺産」への制度認定の実態に迫った佐野真由子日文研准教授の発表は、共有の「範囲」をめぐるものだったと言えるだろう。一見コミュニティの結束を強め、文化の共有を促進するように思われる制度や政策の整備が、ともすると共有範囲を「直接的」(と認知・認定された)当事者に限定し、コミュニティ外部に対する排他性を発揮し、より広範囲な担い手を取りこぼしかねないことが浮き彫りにされた。

いっぽう、経済的観点から里山保全をめぐる最近の動向を報告した嘉田良平地球研教授と、近年盛んに行なわれている地方アートイベントの意義を分析した阿部健一地球研教授の発表は、共有の「方法」を検討するものだったと言えるだろう。自然資源の保全者と受益者の乖離が

#### ◆開催概要

2012年9月14日(金) 13:30~16:30 (国際日本文化研究センター内講堂(日文研ホール))  
主催:国際日本文化研究センター、地球研

〈総司会〉松田利彦(日文研准教授)

■開会の挨拶 佐藤洋一郎(地球研副所長)

#### ■講演

「中世の『惣』および『universitas/communitas』をめぐる」  
マルクス・リュッターマン(日文研准教授)

「『人類の無形文化遺産』になった祇園祭——文化は誰のものにされようとしているのか」  
佐野真由子(日文研准教授)

「里山の生態系サービスと今後の国土管理」 嘉田良平(地球研教授)

「分かちあう豊かさ:環境と文化」 阿部健一(地球研教授)

#### ■パネルディスカッション

松田利彦、マルクス・リュッターマン、佐野真由子、嘉田良平、阿部健一 〈進行〉鞍田 崇(地球研特任准教授)

■閉会の挨拶 宇野隆夫(日文研副所長)

進むことで、現在では地域環境を維持する担い手が決定的に欠落し、その存続が危ぶまれている。そうした状況を打開する取り組みは、すでに行政から草の根の市民活動まで、さまざまなレベルで提起されているが、それらをより積極的に推し進める際に留意すべきポイントが、あらためて指摘された。

### 緩やかな共有に活路を見いだす

文化にせよ、環境にせよ、特定のだれかに帰属するものではなく、広く「共有」されることが前提とされている。だが、そのことは担い手が曖昧化し、ひいては当の文化・環境の存続の危機を意味することにもなる。そうした弊害を克服する術として伝統的に機能していた共同体意識が希薄化した現在、いかなるかたちで私たちは文化と環境を維持すべきなのか。その担い手はだれなのか。そもそも

現代社会において私たちはなにを、どのように「共有」しようとしているのか、またすべきなのか。

四者の発表をふまえたパネルディスカッションは、そうした点の検討を念頭に進められた。そこから浮かびあがってきたのは、文化についても環境についても、曖昧な担い手こそが重要ということであった。

くり返しになるが、文化も環境も本質的に共有されるべきものである。言い換えると、「だれのものでもあって、だれのものでもない」。こうした側面から見た場合、明快な利害関係のなかにある直接的当事者だけでなく、緩やかに問題意識を共有する「間接的当事者」という立場の役割こそが重要であるし、維持・保全の点からは、彼らをいかに取り込むかが問われていると言えるだろう。

ひるがえって考えれば、このような公開シンポジウムという企画そのものは、直接的当事者よりもむしろ間接的当事者にアピールする場として機能しうはずであって、今回の議論も、少なからず同時代の問題を共有するために有効な機会となりえたのではないかと。はからずも、日文研との合同シンポを、単なる年中行事として位置づけるのではなく、より積極的に意義づける方途を垣間見ることもなったように思われる。



くらた・たかし  
専門は哲学。二〇〇六年から地球研に在籍

## フォーラムの検証

第11回地球研フォーラム「つながり」を創る

## 専門の枠を超えた協働がもたらす豊かな可能性

出席 ● 縄田浩志(地球研准教授) + 鞍田 崇(地球研特任准教授) + 石山 俊(地球研プロジェクト研究員) +  
加藤久明(地球研研究支援員) + 辻田祐子(同志社大学生・アイセック同志社大学委員会)

第11回地球研フォーラムのテーマは「つながり」を創る。当日なにか議論され、なにを訴えることができたのか。そして今後、どのような発展がありうるか。フォーラムを組織したメンバーを中心とした地球研の所員に加え、一般参加者として来場した大学生を交えての議論がもたれた。

加藤●今回のテーマ「つながり」は、研究プロジェクトの具体的な話題に直接結びつきませんが、研究者だけでなく行政や企業関係者も交えることで、じつに有意義な議論ができたと思います。

きわめて現代的なテーマでもあるせいでしょうか、当日は登壇者がみな、乗り出さんばかりの勢いで思いを語っていたのが印象的でした。

## 具体的な熱い語りが聴衆を惹きつけた

鞍田●現代的な話題であることは同感。いっぽうで、環境問題という観点から、「つながり」を創ることのどういう意義が明らかになったと言えるのか、検証が必要です。

縄田●テーマとしては抽象的だったかもしれない。地球環境問題へのみなさんの関心に、どれだけ伝えられたのか。議論がどれだけ深まったかも、正直わからないところがある。

鞍田●縄田さんの趣旨説明は、抽象的な話題をいっそう抽象化した感がありました。(笑)

縄田●話題提供者の三人の方が个性的で、具体的なおもしろい話になるのがわかっていたので、和洋中の絶品ステーキを味わっていただく前に、前菜の冷製スープで消化の助けになればという気持ちで、抽象的な内容をあえて話しました。アンケートを読むと、具体的な話が聞けた、その具体性がおもしろかったというところでは満足してもらっているようです。

今回のフォーラムは企業と行政と学術界から講演者をお招きしましたが、いず

◆開催概要 2012年7月8日(日)13:30~17:00(国立京都国際会館) 参加者：のべ約180名

## ■講演

「世界一小さな象と私のつながり」 更家悠介(サラヤ株式会社代表取締役社長)  
「復興の真ただ中から—地球研に期待するもの」 碓川 豊(岩手県大槌町町長)  
「関係主義的視点からの全方位『関係』づくりマーケティング」 井関利明(慶應義塾大学名誉教授)  
「地球研の目指すもの—学問領域を超えたつながり」 阿部健一(地球研教授)

## ■パネルディスカッション

パネリスト: 更家悠介、碓川 豊、井関利明、窪田順平(地球研教授)、石山 俊(地球研プロジェクト研究員)  
司会: 縄田浩志(地球研准教授)、阿部健一

れも立場を越えたコミュニケーションを取りたいと強く思っておられる方ばかりでした。たとえば、大槌町の碓川町長のお話には、学术界に訴えたいこと、また聴衆、国民に知ってほしいことが明確にあった。それを会場のみなさん全員が心から受けとめていたと思います。

## 会場で生まれたリアルなつながり

鞍田●ここ数年、若者の間でも、一人で占有するよりも、だれかと共有することのほうに重きを置く傾向が顕著になってきました。その大きな動因となったのは、インターネットやSNSの浸透です。そういう現代的な「つながり」は、今回は注目されなかったのでしょうか。

縄田●講演会は基本的にやっぱり、フェイス・トゥ・フェイスでしないと。リアルなつながりはむしろいまだからこそ重要。フォーラムの話題提供で、サラヤ社長の更家さんは社員の方が会場にいることをわかっていて、彼らに話す機会を振りまいたよね。それを受けて、大槌町の碓川さんもまた、自然とフロアにいる同町職員に発言を促されていた。あの場をじつさいに共有しているからこそその雰囲気ができたと感じます。

鞍田●辻田さんは当日、聴衆の一人として参加されていたそうですね。

辻田●電車の中で告知ポスターを見たときに、タイトルにとっても惹かれました。その1週間ほど前に、私の所属するアイセック\*の「環境問題に対してなにかできるのか」を考えるミーティングで「つながりを大事にする」という意見が出たからで

す。学生団体だからこそ、企業や研究所、行政、大学など、いろいろな方と知り合える。それを活かして媒体の役割をする、つながり」を創るだけでも、なにか生まれるのではないかと話したのです。

## 知識は「専門家」の専売品でない

辻田●ただ、私たちは専門家でもなんでもない学生です。環境問題に取り組む学部にいるわけでもありません。フォーラムに参加してとても有意義でしたが、どこかで引け目のようなものを感じました。社会人の方と比べて知識差もあり、どういふうに環境問題と向き合うかはわからないままでした。

石山●話題提供のなかで地球研の阿部さんが言ったように、「専門家」とはだれのことかを考える必要があります。魚をほんとうに知っているのは研究者ではなく地元の漁師さんで、彼らこそ専門家と言うべきです。研究者の知識は断片的です。いや、漁師さんは漁師さんで、別の側面から見れば、断片的でしょう。だからこそ「つながり」が重要になる。このことは地球環境問題を考える上でも重要だと思います。

それぞれの専門性ももちろん大切ですが、意識して交流というか「つながり」をもたないと、そのまま、より狭い限られたほうだけに進んでしまい、問題の解決から離れていく危険がある。近年、地球環境研究でさまざまなレベルの「連携」や「協働」が強調されていますが、今回のフォーラムはそうした点に関わるものだったと言えるのではないのでしょうか。  
鞍田●問題は「つながり」をどうやって創るかですね。

\* 海外インターンシップの運営を行なう学生団体・NPO法人。活動の一環として環境問題に関わる企業・団体との連携に取り組んでいる。



右から  
かとう・ひさあき  
専門は環境社会学、経営組織論、文化情報学。二〇一一年から地球研に在籍。

なわた・ひろし  
専門は文化人類学、社会生態学。研究プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究  
プロジェクトアラブ社会におけるなりわい生態系研究

編集●石山 俊+鞍田 崇

## 異なる視点への感度を研ぐ

辻田●環境問題はたくさんありすぎて、自分はなにをすればいいか、よくわからないのが正直な気持ちです。個人的にも多くの興味の中から、どれを取ったらいいのか、なにをしたらいいのか、わからないという状態になることがあります。しかし、やっぱりすべては学べず、なにかを選ばないといけません。

加藤●「ストーン・スープ」という童話があります。旅の僧侶たちがたまたまある村にたどりついた。食事の支度をしようと思うのだけど、村人たちは相互不信に凝り固まっていて、だれも手を貸してくれない。困った僧侶たちは鍋の中にただ石を入れて、お湯を焚き始めた。子どもが興味本位で「なにを作っているの」と聞いたら、「ストーン・スープだよ、お肉があったらちょっとおいしくなるかもしれない」と。「じゃあ、もってくる」と言って、よくわからないけど、だんだん人が集まってきておもしろい鍋ができた。お互いの相互不信が解けあって、気がつくとながりができたという話です。

日常、何気なくしていること、研究していることをまったく違う視点から見た瞬間に、いつも見慣れたものとまったく違うように見える。そんな「気づき」を通

じて自分の日常を再評価し、初めて「つながり」が創れるのではないのでしょうか。われわれは近視眼的になりがちで、なんでもすぐに使えるものばかりに、目を向けているところがあると思います。

石山●今回のフォーラムがきっかけでサラヤの企業訪問をしたのですが、とにかくおもしろい。すごく新鮮です。それが最終的に環境研究にとってどういうことかは、もちろん考える必要はありますが、とにかくおもしろいと思う、その好奇心はいちばん大事なことだと感じました。

縄田●ディスカッションで更家さんが言っていたように、アンテナを張っていることが重要なんですね。アンテナをあまり張っていないとか、張る範囲が限られている人もいるとは思いますが、可能な限り全方位で、いろんなことにビビッとくる。そういう心構えをそれぞれの人がもてば、なにかのときにお互いが反応しあえることがある。

加藤●地球研は流動性が定められている組織だからこそ、そういう仕掛けを作っておいたほうがいいと思います。

縄田●地球研のプロジェクト単位でもまったく同じ。それぞれ世界の違った場所をターゲットにして、そこで暮らすいろいろな方がたと出会っている。彼らのライフ・ヒストリーや個人的な事情を知る機

会もある。そのストーリーを受けとめて、地球全体の環境問題のなかにしっかり位置づけ直すことが大事です。それら個々の物語の価値をどう高めていくのかは、地球研の課題の一つでもあると思う。

## 自身の物語を語り 他者の物語を受け止める

加藤●地球研に来た最初の3か月は窒息状態でした。環境研究と、自分の方法や物語とを合わせる手がかりが見つからないから。空気が読めるまではもう、毎日が鬱屈した気分でした。

石山●それは少なからぬ人が同じ状況だと思えますよ。

加藤●今回のフォーラムでは、地球研で事前にプレ・フォーラムをしました。企画者の縄田さんは、自分の物語をちゃんと創って語り、ナラティブ性を強調されましたが、これがとてもよかったです。フォーラム当日にも活かされていましたよね。

鞍田●今回のフォーラムでは、事前の準備や当日の議論で生まれた「つながり」もありました。みなさんのお話から、それを継続して育てていくこと、また個々の日々の活動にそれをフィードバックすることの意義が浮き彫りになったかと思えます。

2012年8月21日 地球研「はなれ」にて

### ■ コメント ■■■■■ アンケートから ..... 加藤久明 (地球研プロジェクト研究推進支援員)

フォーラムの全体テーマ「つながりを創る」は地球環境問題の解決にダイレクトには結びつかないものの、これからの社会づくりを考える上で重要なテーマです。その点を勘案し、企業、行政、学術の立場から、さまざまな知見を提供するスタイルとなりました。顔ぶれも議論の内容も、これまでの地球研フォーラムとは明らかに異なっていたと言えるでしょう。

そのためでしょうか、今回のアンケート結果で目に付くのは、「無回答」が多いことです。これには「書く時間的余裕がなかった」など、いくつかの要因が考えられます。受け手の認知前提を越えた未知のものをフォーラムで提供し、それに対するとまどいがあったからかもしれません。

ですが、とまどいがあるとしても、つまらなかったわけではないでしょう。現に回答者の多くが「とてもおもしろかった」・「おもしろかった」と回答し、「おもしろくなかった」という回答は前回から減少しています。

肯定的な評価の理由は、「新しい未来へ私たちからすべきことの助言を得られたから」、「現場のお話がじかに聞けた」、「テーマが身近な課題を捉えている」など。他方で、「おもしろくなかった」理由では、せつかくの具体的な話題が、「言葉あそび」的なまとめ方に陥りかねない要素があった点が指摘されています。環境問題へのダイレクトな結びつきは措くとしても、より身近な視点からの議論に多くの方が共感を寄せていただけたと思います。た

だ、それをどこまで十全に展開できたかは、きちんと検討すべきポイントかもしれません。

つながりを創るためには、従来の社会的なカテゴリを乗り越えることが重要です。そもそも、アンケート自体があるカテゴリに押し込む行為だと考えれば、そのような行為に意味を感じない人びとが前向きに無回答としたとも考えられるでしょう。

なにはともあれ、第11回めのフォーラムは終わりましたが、つながりをテーマとすること自体に終わりはありません。人がつねに入れ替わり、つながりを創出し続ける地球研が、未来設計を考える上で重要なキーワードを議論の俎上にあげ始めたことに相応しい、よいアンケート結果だったのだと思います。

## 百聞一見——フィールドからの体験レポート

世界各国のさまざまな地域で調査活動に励む地球研メンバーたち。現地の風や土の匂いをかぎ、人びとの声に耳をかたむける彼らから届けレポートには、フィールドワークならではの新鮮な驚きと発見が満ちています



## モンゴルの大草原で森林の大切さを考える

幸田良介プロジェクト研究員

こうだ・りょうすけ

専門は植物生態学、哺乳類生態学。研究プロジェクト「人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生」に所属。2011年から地球研に在籍。

「えっ、モンゴルに森林があるんですか」。指導していただいていた先生の計らいで初めてモンゴルに行くことになり、大学院生だったばかりは、思わずそう聞き返した。

### モンゴルの多様な植生

考えてみれば国境の北側にはシベリアの広大なタイガが広がっているのだから、森があるのも不思議ではない。だが、モンゴルと言えば見渡す限りの大草原をウマが優雅に走り回っている……。そういうイメージができてしまっていたので、「モンゴルの森林」と言われると、なにか不思議な感じがしたのだ。

モンゴルは南に行くほど基本的には降水量が減少して乾燥する。景観も北から順に針葉樹の森林地帯（タイガ）、森林ステップと呼ばれる森林と草原の複合、大草原のステップ、乾燥ステップと呼ばれる乾燥草原、そして南端のゴビ砂漠と大きく変化する。調査で南の乾燥草原を訪れた翌日に北の森林地帯へ向かった際には、目の前に広がるあまりにも違う風景に、ほんとうに昨日と同じ国にいるのかと思ってしまったほどだ。

### 森とのつながり、森の意義

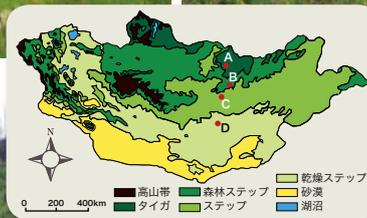
森林の存在は、モンゴルの自然生態系にとってひじょうに重要である。森林があると土壌水分がしっかりと保たれ、森林下部の草原植生を潤してくれる。降水量が年間で数百mm程度に止まるモンゴ

ルでは、土壌水分の保持はきわめて重要な意味をもつ。また森林は野生動物の棲み処としても重要なようである。アカシカというシカがどのような場所に棲んでいるのかを調べたところ、大きな森に多数生息するいっぽうで、近くに森がない草原にはほとんどいないことがわかった。

モンゴルに住む人たちにとっても森林は欠かせない。人びとが暮らす移動式住居「ゲル」は、ヒツジの毛のフェルトと木材の骨組みを組み合わせられて作られている。また、木材はヒツジやヤギといった家畜を夜間囲い込む柵にも使われる。モンゴルの森林は国土面積の約12%程度とひじょうに限られているが、自然生態系と人びとの生活にとって欠かせないものなのである。

### 人の手で劣化・減少する森林

このように重要なモンゴルの森林だが、近年その劣化・減少が大きな問題となっている。原因については多くの指摘がなされているが、そのほとんどは人間



**A: 北部の森林地帯** もっとも多いのはカラマツの森林で、他にもアカマツやゴヨウマツ、トウヒのなかまなどの針葉樹が多い。伐採や山火事などの後はカンバやポプラのなかまも見られるが、樹木の種類は限られる  
**B: ウランバートル北東部の森林での違法伐採の痕跡** 無数の切り株と、乗りいれた車の轍がみられた  
**C: 中部のステップでの調査** イネ科などの草本が多いが、マメ科などの灌木が混ざる場所も少なくない  
**D: 南部の乾燥ステップ** 降雨の有無で緑の草原になるかどうか左右される

による不適切な森林利用が関係する。大規模な商用伐採や住民による違法伐採、放火や火の不始末による森林火災、森林周辺での不適切な放牧などが、森林の劣化・減少を進行させているのである。

首都のウランバートル近くの森林に入ってみると、違法伐採された無数の切株を容易に発見できる。モンゴルのように降水量が少ない環境では、一度破壊された森林が回復するのは容易ではない。植樹による森林再生事業がモンゴル各地で始まっているが、減少を食い止めるにはまだ至っていないのが実情のようだ。

### 日本との行き来のなかで

モンゴルでの調査を始めるまで、ぼくはヤクスギの原生林で有名な屋久島で調査をしていた。それでなくても日本にいくと、森林を見ない日などほとんどない。言うまでもなく地球研の周りも森だけである。ともすれば当たり前の存在のように感じていた森林の大切さをモンゴルに行くたびに実感し、日本に帰るたびに森を見るとふっと心が落ち着く自分を感じながら、きょうも調査を続けている。

## インド北東部における タケ(メロカンナ)の 一斉開花と関連の諸施策

野瀬光弘プロジェクト研究員

のせ・みつひろ

専門は森林資源管理学。研究プロジェクト「人の生老病死と高所環境——『高地文明』における医学生理・生態・文化的適応」プロジェクト研究員。2011年から地球研に在籍。

タケというとアジアのイメージが強いが、とくにインドの竹林面積は2009年時点で1,396万haと世界最大で、国土面積の4.6%を占める。竹林は北東部7州に偏在しており、州別に見てミゾラム州とマニプル州では面積に占める比率が40%台とかなり大きい。じっさいに現地へ足を運んでみると、谷一面タケに覆われている壮大な景観を見ることができる。ミゾラム州へ行くまではタケが着目される理由が実感できなかったが、目の当たりにして地域資源としての重要性を強く認識した。

### 48年ぶりの一斉開花

世界には約1,000種のタケ類があるとされ、多くは数十年に1回の周期で一斉開花する。ミゾラム州で最優占するメロカンナ(*Melocanna baccifera*)の開花は、記録上1815年、1863年、1911年、1958-1959年といったように、おおむね48年周期であったとされる。幸運なことに、事前の開花を見越して設置した固定プロットで、メロカンナの一斉開花が起こった。一斉開花の前後にさまざまな情報を観測したことは世界で初めてだったらしく、とても貴重な経験となった。一般的にタケの球果は小指の先ほどしかないが、メロカンナはこぶし大くらいのサイズで、重さは300g以上にもなる。一生に一度見られるかどうかということもあって、球果の実物を目にした時は感慨ひとしおだった。



National Bamboo Missionによってタケを植林したサイト(2009年11月)



インド北東部7州

1:ミゾラム州 2:マニプル州 3:アッサム州 4:アルナーチャル・プラデーシュ州



タケとは別の調査、アルナーチャル・プラデーシュ州で地域活動を中心的行なっている住民数名を対象としたヒアリング。ちょっと寒かったので薪ストーブに火を入れてトウモロコシを焼いてくれている。左端が筆者(2012年8月)

### 焼畑耕作と結びついて 生き残ったメロカンナ

ミゾラム州でメロカンナがいまも優占する要因の一つに焼畑の存在があげられる。タケの伐採後に火入れをしても地下茎は生き残り、休閑期間に再生するサイクルが繰り返されるからである。

ところが、ミゾラム州ではNew Land Use Policyと呼ばれる制度によって焼畑から園芸作物栽培や畜産などへの移行が近年推進されている。転換に掛かる費用をまかなうために、現地の1人当たりGDP(名目)の約2倍に相当する1世帯当たり10万ルピーの交付金の配布が2010年から始まった。そのために焼畑を中止した人が出てきているが、経営転換の成否は今後の推移を見守ることとなる。

### 資源としての タケ植林地を造成

2006-2007年には、National Bamboo Missionという連邦政府のタケ資源育成プロジェクトがスタートした。インドの紙生産では原料に占めるタ



一斉開花して実をつけたメロカンナ(2008年4月)

ケの比率が大きく、同じ北東部のアッサム州には年間生産量が10万tの製紙工場がある。そこへのメロカンナ供給を目的として、州内に複数の竹チップ工場の建設が計画されている。また、メロカンナの一斉開花を契機に、マットや合板などに加工しやすい竹種への転換を試みる動きがあり、苗圃で外来種を試験的に植栽している。

州政府の担当者によると、両方とも事前にマーケティングを行なったわけではなく、ほんとうにうまくいくのか心配な面がある。初期段階では州政府主導の動きだけが目立ち、地域住民による自主的な取り組みはほとんど見られなかった。タケという「地域資源」の有効利用をどう進めるのかはミゾラム州の重要な課題の一つなので、これからも関心を持って注視したい。

# 砂漠化と貧困への実効あるアプローチをめざして

研究プロジェクト「砂漠化をめぐる風と人と土」

話し手●田中 樹(地球研准教授)×聞き手●加藤裕美(地球研外来研究員)

編集●編集室

砂漠化の最前線であるアフロ・ユーラシアの半乾燥帯。この地域で進む資源と環境の劣化は、貧困と隣り合わせの人びとの生活にどのような影響を及ぼしているのか。問題に対応するためにはどのようなアプローチが提案できるのか。今年度から本研究がスタートしたプロジェクトのリーダー、田中樹准教授に話を聞いた。

加藤●砂漠化のメカニズムを長く研究されてこられて、それを今回のプロジェクトにどのようにつながれるのですか。

田中●これまでの研究の集大成ですね。

大学を出て、1983年から1987年まではケニアで働いていました。まず海外で社会経験を積んだことが、いまの私の研究の基盤になっています。

そのあと大学院に入って、畑の土壌の表面にできる薄い膜が水の浸透を妨いだり、土壌侵食を加速して土壌荒廃につながったりするメカニズムの研究。同時に、海外での在来農耕の研究に従事しました。

## フィールドに腰を据えた研究

加藤●そのフィールドが今回のプロジェクトの調査地の一つのインドですか。

田中●デカン高原で、研究といっても、牛で畑を耕す仕事ばかりでしたが、現場のおもしろさを拾い上げるスタイルはそのときにできたような気がしますね。

その次に、タンザニアで在来農耕を研究しました。おもに火入れ農耕、それにピット農耕—格子畝農耕ともいいます—の機能評価をしていました。

同じ時期に、デカンの在来農耕技術を砂漠化が起っている西アフリカのサヘル地域に水平移転する可能性を探る研究にも参加しました。この課題はいまの地球研のプロジェクトの活動項目の一つです。加藤●なるほど。

田中●インドの農耕からは、「なぜ人は土を耕すのか」という根本的な問いへの答えが見つかったように思います。インドは半乾燥地でも人口が多い。しかも、貧

困はあるが絶対貧困ではない。いっぽうでサヘル地域は人口が少ないが、絶対貧困があります。同じ半乾燥地でも、かたや高人口で、かたや低人口。人口が多いと資源や環境が劣化すると言われていますが、かならずしもそうではない。

アフリカでは、人口爆発が起り、その結果として資源環境が劣化して砂漠化が起っているという話になりがちです。しかし、村落では逆で、むしろ過疎化が進行して人の手が届かない。土が流れても補修に労力が投下できない。人口が多くなると困るという、かつての定説はかならずしも正しくないと思っています。

加藤●都市への人口集中が問題ですか。

田中●アフリカの都市の周辺部は乱開発で荒れた雰囲気です。一時的に人が集中すると、落ち着くまでは乱雑な状態になる。しかし、これは過渡的な状況で、5年、10年の単位で観察していると、時間の経過とともに整備が進み、都市周辺部は農村都市のようになります。農村と都市の雰囲気を兼ね備えた緑の多い空間が生まれる。そういう姿をみるにつけ、農村部に人間を留めさせることが必要だと。そうでないと、資源や生態環境の物理的な劣化は止められない。

## 見えない砂漠化にも目を向ける

加藤●インドと西アフリカのほかは……。

田中●南部アフリカのナミビア。

加藤●タイプの違う砂漠化ですか。

田中●典型的なイメージの砂漠化問題が顕在化しているのが西アフリカ内陸の半乾燥地、いわゆるサヘル地域です。アフリカ南部のナミビアでは、顕在化はしていない。人口がとても少なく、しかも約10ha単位で各世帯が土地を囲いこんでいるからです。しかし、おそらく5年、10年使うと駄目になるくらい土の質が悪い。これから砂漠化を起こす可能性のある地域です。土壌や生態基盤の脆弱性を評価して、砂漠化を未然に防ぐ研究をしたい。

そのときに参考になるのが、すでに砂漠化が顕在化したサヘル地域の事例です。

## 水平技術移転への関心

田中●インドの半乾燥地は、土壌資源もそれほど豊かでないのに、数千年の単位にわたってあれだけの人口をなぜ維持できたのか。すごく不思議です。

インドには在来農耕技術の膨大な蓄積がある。それがいま、消滅の危機に瀕しています。急速な経済発展に伴って、在来農具や管理技術はものすごい速さで廃れている。地球環境問題や生態環境保全、種の多様性も大事だが、人間が育んできた知恵や伝統技術は、その世代が断絶すると二度と戻らない。そのインベントリーのいくつかをアフリカに活かさないかと思っています。

加藤●移転先は南部アフリカですか。

田中●西部と、どっちもやってみたい。状況が許せば、西アフリカの伝統技術のいくつかをインドで試したいとも思っています。インドからアフリカとか、アフリカからインドとかいうのは、大風呂敷です。できたらおもしろい、痛快だというのはありますね。とくにアフリカからアジアへの移転は。

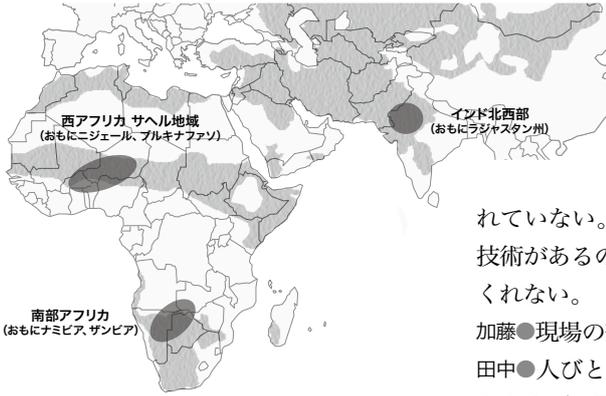
## 人間の暮らしを視野に入れる

加藤●プロジェクトの柱はどこに……。

田中●誤解されるかもしれないが、プロジェクトを設計するときは、柱は用意していない。大雑把な軸が三つほどあり、その軸に肉がついていくというイメージ。

砂漠化対処の研究については、すでに10年を超える仕事の土台があります。ある意味、農学的な砂漠化研究には結果が出て当然です。プロジェクトはあと4年ですが、早ければ2年めくらいに「成果がありました」となります。どンドン前倒して達成したい。残りの時間で新しいテーマだとか新しい発想だとか、どれだけクリエイティブなものを上乗せするか

アフロ・ユーラシア半乾燥ベルトの分布とプロジェクトのおもな調査対象地



が、プロジェクトの成果の評価になるんじゃないかな。

加藤●その大雑把な三つの軸とは……。

田中●「風と人と土」です。とはいえ、直感的にはわかっているんですが、まだ言葉にならない。

「砂漠化」というのは状況を表す言葉、資源生態環境が劣化するという意味ですね。私たちは、これに別の側面を加えます。貧困の問題です。貧困は、人の文化、社会、経済の問題です。従来の砂漠化の認識はどうしても人が加害の立場になって、資源や環境に悪影響を及ぼすという図式で、物理的な現象しか見てこなかった。しかし、アフロ・ユーラシアの半乾燥地では砂漠化問題と貧困問題とは不可分です。これを関連づけて理解しなければなりません。

加藤●そこが、このプロジェクトの新しいところですか。

田中●「古くて新しい問題」への取り組み。砂漠化が騒がれ始めたのは1960年代です。1994年に砂漠化対処条約が批准されて、その後うまくいったという話を聞いたことがないでしょう。地球規模での課題は解決するどころかますます深刻さを増している。研究テーマとしてはまったく新しくないが、個別技術についてはすばらしいストックがあります。ただ、それがなぜ解決の緒になっていないのかを見つけるのが新しさといえは新しさですね。

## ニーズに寄り添う実践を

田中●文献もたくさんあり、状況はわかっている。古今の一つひとつの技術にも合理性がきちっとある。ところがその生態環境と人と技術のインターフェースがと

れていない。たとえば、土壌侵食を防ぐ技術があるのに地域の人びとが実践してくれない。

加藤●現場の想定が足りないのですか。

田中●人びとのニーズではないからです。たとえば、西アフリカは絶対貧困地域です。すると、20年後の土壌の保全よりも1か月後や来年の食糧のほうが心配です。侵食対策に労力を費やしたって来年の取量が上がるわけではない。だから、どうしてもリアリティが下がる。

植林も典型例です。砂漠化への対処技術の一つに植林がありますが、サヘル地域ではだいたい失敗しています。木が切られたから植林、では対症療法だからです。切らざるをえない根本原因を解決していない。だから植えてもまた切られる。

その土地の社会生態環境や人びとのニーズ、感覚を知った上で、資源環境の適合性と人びとの技術の親和性をどう捉えるか。これを知ることは応用実践的に絶対に必要ですし、地域理解を深めることにもなります。

もっと言うと、私たちは「経験則以上学問未満」のあたりを丁寧に捉えたいのです。農学とはそもそも、人と自然との相互連関を扱う学問。人びとにじっさいに使ってもらえる知識や技術を探りたい。

地球環境学の「地球」という言葉はときどき私たちが勘違いさせる。環境の最小ユニットって、自分とその周辺でしょう。人がいないと、環境という言葉は成立しない。それを見たこともない地球スケールをイメージして、なにかをやりますとおかしくなる。

## 外部者の視線を活かす

加藤●インド、西アフリカの古い技術は、これからどうなるとお考えですか。

田中●私が意識しているのは、「在来技術の現代化」です。在来技術は古いから廃れるのではない。時代の背景やニーズが変わるからなりを潜めるだけで、知識と経

験はストックされている。これを掘り起こしてインターフェースを工夫すれば、現代に使えるかたちで復活させられます。加藤●すでに実証されているのですね。

田中●インドでも西アフリカでも、いくつか発掘しています。土地の人は知っているのだから放っておけばいいのではないかと、それは違う。外部者が「それはおもしろい。どうしてなの」と尋ねることで、彼らは自分たちの経験と知識を再発見する。外部者にはそういう重要な触媒の役割があります。それを応用実践の技術論にまで組み込みたい。

もう一つのキーワードは「新規技術の在来化」。在来技術も、別の土地の人にとっては新規技術ですね。それがどのように受け入れられ、定着・普及・継承されるのか。このプロセスを解き明かしたい。

## 研究の射程は広い

加藤●現地の人たちに研究成果を還元することが念頭に置かれているのですか。

田中●もちろん、それができなくては。基礎的な研究はもちろん大切ですが、どうせやるなら実務者にバトンタッチするところまでです。そのために、もっと現地のことを知りたい。

たとえば、イスラームから見たサヘル世界。サヘル地域からつながるメッカ巡礼の道と農耕文化の関わり、西側の援助とは違う経路や文脈での地域支援。それと、都市に住む人びとや社会的弱者層にとっての砂漠化と貧困……。

加藤●構想を進める上での課題は……。

田中●治安の悪い西アフリカは、渡航できなくなる可能性があつて、場合によってはユーラシア、インドや中国、モンゴルに拠点を移さざるをえないかもしれない。北アフリカ、スーダン、イエメン、オマーンやイランにも興味はあります。これらを連続させてアフロ・ユーラシアの半乾燥ベルトを広くしっかり見たいという野心もあります。

2012年5月9日 地球研「中庭」にて



かとうゆみ  
専門は文化人類学、生態人類学。二〇一〇年から二〇一二年九月まで地球研外来研究員。二〇一二年一〇月より早稲田大学アジア太平洋研究センター助手。

たなかこうぞる  
専門は境界農学。研究プロジェクト「砂漠化をめぐる風と人と土リサーチ」。二〇一二年から地球研に在籍。



# 遠きにおいて思うもの

遠藤崇浩(大阪府立大学現代システム科学域 准教授)

私は2004年の12月から2010年の3月まで地球研に在籍しました。研究プロジェクト「地球規模の水循環変動ならびに世界の水問題の実態と将来展望(リーダー:沖大幹さん、鼎信次郎さん)」、「都市の地下環境に残る人間活動の影響(リーダー:谷口真人さん)」に携わり、さらにこれらと同時並行的に人間文化研究機構の連携研究「人と水(リーダー:秋道智彌さん)\*」にも参加しました。どっぷり「水」に浸かった日々でした。今も水管理の研究を続けていますが、地球研から研究職のキャリアをスタートできたことは、現在はもちろん、今後の研究にも決定的な影響を与えるだろうと感じています。

## 政治学とアイスコア

地球研の良さは何と言っても「色々な話が聞ける」ことに尽きるのではないのでしょうか。私は政治学が専

門ですが、アイスコアや安定同位体の話をはじめ聞いた時は、何だか背中が寒くなりました。しばらくしてFS発表会などでアイスコアの話を知ると「何だ、またアイスコアか」と思ってしまう自分もいたのですが、耳がよほど贅沢になっていたのでしょう。いきなり近隣分野の研究者が多い大学の法学部に就職していたら、絶対に聞けない話です。

逆に、私が所属する社会科学側から自然科学者に対して同じくらい衝撃的な「ものの見方」を提供できたのだろうかと今でも自問しております。地球研では「地球環境学」との関係が問われる局面が多いのですが、いったんその問いを横において、ただ単純にそれぞれの分野の研究紹介を披露する機会、たとえば談話会などは、ぜひ残しておいてほしいと願っています。

## 人的ネットワークの維持・強化を

任期制は良くも悪くも地球研の大きな特徴です。地球研は期間限定で、特に若手研究者にトレーニングプログラムを提供しているともいえます。こうした見方に立つと、公益財団法人結核予防会結核研究所は地球研の未来像を考える上で示唆に富むかもしれません。筑波大時代の同僚から聞いた話



地球研フットサルチーム「ふっくら」メンバーと。なぜか私だけ普段着

ですが、結核研究所は長年にわたり開発途上国から研修生の受け入れ事業を進めてきたそうです。その同僚はエイズ問題や公衆衛生問題を専門としており、世界各地で調査を行った際、あちこちで「日本の結核研究所で研修を受けました」という人に会ったそうです。長年に渡り研修事業を継続してきた結果、世界中に人的ネットワークがはりめぐらされたわけです。

地球研の任期制も、見方を変えれば、人的ネットワークの網の目が編まれるスピードが速いということです。地球研側から年末の報告会や各種セミナーにかつての在籍者を呼ぶ、また大学側からは地球研スタッフに講義の機会を提供するなど、人材ネットワークの維持・強化の仕組みを作る必要があると思います。

## 最後に若手研究者に一言

私はこの春、運よく、いわゆる「任期なし」のポストに就職できました。「任期つき」のまま、プロジェクト運営に関する様々な業務をこなしつつ、研究業績を積んでいくのは大変かと思いますが、任期つきの日々を経験した者からのアドバイスを一つ申し上げると、既にお気づきの方が多いと思いますが、実質的な任期は「マイナス1.5年」です。たとえば5年間の任期があったとします。すると最終年度の始めには履歴書を送りはじめなくてはなりません。そのとき履歴書に書ける業績は「既に公刊されたもの」です。印刷中や審査中では業績としてカウントされない可能性があるためです。最終年度のあたりに既に公刊済みであるためには、遅くとも前年度の中ほどには投稿済みになっていないと間に合いません。つまり任期は5年であっても、それはフルに使えないのです。実に慌ただしいサイクルですが、

ぜひ次のポストを目指して頑張ってください。またプロジェクトリーダーにおかれましても、こうしたサイクルを御理解いただき、若手研究者の次のステップを支援していただければと思います。



えんどう・たかひろ

専門は政治学。水管理政策、とくに渇水対策、地下水管理がおもな研究テーマ。筑波大学を経て2012年4月より現職。

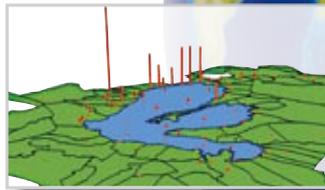
\*連携研究「日本とユーラシアの交流に関する総合的研究」内「湿潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」

所員紹介 — 私の考える地球環境問題と未来

## バーチャルアースによる国土管理 — 地図と対策とくらし

矢尾田清幸

(地球研プロジェクト研究員)



バーチャルアースによる  
空間データのイメージ



私たちが日常生活で利用するさまざまな情報は、性別や年齢のような人に関連するもの(属人データ)と、家や学校の場所といった位置に関連するもの(属地データ)の、二つに大きく分けられます。私が研究で利用するGIS(Geographic Information System)は、後者の属地データに経緯度のような位置情報を付与して空間データとし、コンピュータの中に作ったバーチャルアース(仮想地球)上で衛星画像や航空写真等と統合することによって事象を把握し要因を分析するものです。

### 埋もれたデータを使いこなす

私が所属する研究プロジェクト「東南アジアにおける持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計」の対象地域であるフィリピンにおいても、国の機関が作成した空間データが存在します。ただ、わが国と同様に、その統合に課題を抱えています。すなわち、地方行政機関や大学等の研究機関によって作成・利用されたものが共有されていないのです。

理由は簡単で、各業務や研究の終了とともにお蔵入りにされるためですが、その中には局所的であっても有用な情報もあると考えられます。そこで、ラグナ湖集水域の食と健康リスクに関連する空間データを収集、分析し、効率的な国土管理に向けた空間データの整備を提言するのが私の仕事だと考えています。

この目的のため、行政・研究機関と

もに、以下の三つの流れでアプローチしています。

#### 1. 各種空間データの統合

衛星画像や航空写真、地形図、標高に加え、各機関が作成した空間データを収集し、その内容や精度から利用可能なものを抽出、統合する過程です。これにより、今後の分析に必要なデータが明らかになるとともに、空間データのフォーマットの統一が可能となります。

#### 2. リスクの識別

食と健康に関してはいろいろなリスクが考えられます。たとえば洪水ならば、河川の分布や傾斜からリスクの高いエリアを抽出できます。また、河川水や堆積物に含まれる有害物質であれば、サンプリングポイントと計測結果をリンクさせることで汚染状況の空間的な把握が可能となります。

#### 3. リスクの共有

2.で明らかになったリスクの状況を、地域住民に提供して情報を共有する過程です。その結果、住民がみずから取り囲むリスクの状況を認識し、「この井戸水を飲むとお腹を壊す」や「あそこのゴミの堆積がひどい」のような、これまで埋没していた局所的情報が、同じフォーマットの地図上で得られることが期待できます。さらに、そのような新たな情報を加えて充実させた空間データを利用して対策を立案すれば、地域住民の暮らしを改善する可能性がより高くなると考えられます。



大学研究者、行政担当者を対象にしたGIS講習会  
(2012年8月開催)

### フィリピンでの蓄積を世界で活かす

このような官学民での空間情報の共有と更新は、日本においてもいまだ達成されていない目標ですが、人びとの積極的な姿勢に触れているなかで私は、これからその体制を構築していくフィリピンのような国のほうが、達成しやすいのではないかと感じています。今後、バーチャルアースを利用した国土管理に貢献できるよう、一般論やスローガンではなく、実行可能な政策を提言したいと考えています。

現在、衛星画像を除けば、空間データの入手・構築の難易は国や地域によってさまざまで、その克服には多くの研究事例のストックが不可欠と考えられます。そこで将来、地球研が内外のそのような地域からの相談相手としての役割を担える機関になればいいと、一研究員として担当部局を遠くから応援しています。



共同研究者コンセプト博士邸での会食風景(右端が筆者)。大量のごはんの周りに大量のおかず。肉、肉、魚、肉、野菜

#### やおた・きよゆき

■略歴 1970年8月生まれ、176cm、83kg

地球環境学博士(京都大学)

京都府農業総合研究所(現、農林センター)研究員、

立命館大学地理学専攻実習助手を経て、2011年4月より現職

■専門分野 地球環境学、空間計量経済学、GIS、リモートセンシング、獣害防除

■地球研での所属プロジェクト 東南アジアにおける持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計

■研究テーマ 食と健康リスクに関する空間データの構築と分析

■趣味 マリンアクティビティ

#### ■リーダーからひとこと

嘉田良平(地球研教授)

本格的な海外調査は初めてののに、矢尾田さんは地元研究者からひじょうに厚い信頼を得ています。大阪人特有のユーモア、冷静な観察眼、そして現地から学ぼうとする研究姿勢がポイントのようです。この調子で最後までよろしく!

イベントの報告

第12回 地球研地域連携セミナー  
FUJIYOSHIDA

報告  
分かちあう豊かさ  
地域のなかのcommons  
2012年10月13日(土)13:30~17:00  
(富士吉田市民会館 小ホール)

大切なものを共有し分かちあう。この考えは、commonsと呼ばれています。第12回地球研地域連携セミナーは、富士山の麓にある富士吉田にて、富士山を背景に地元の方がたとcommonsについて理解を深めることを目的に開催されました。



一つめの講演では、渡辺豊博都留文科大学教授から、富士山を訪れる人びとによるゴミの放置やし尿の垂れ流しなど環境問題・被害について現状報告があり、パイオトイレ設置への取り組みが紹介されました。

続く中島直人慶應義塾大学環境情報学部専任講師の講演では、富士講をヒントにした地域の人びとによるまちづくりの構想とその実践、今後の関わり方について説明がありました。



三人めの講演者となる佐藤哲地球研教授は、科学が地域づくりのために生産してきたcommonsに関する知識は、現場での問題解決にかならずしも有効に活用されていないことを示し、解決のカギとして、地域社会で多面的な役割を持つレジデント型研究者が重要であると述べました。

阿部健一地球研教授が司会を務めたパネルディスカッションでは、会場から寄せられた質問をもとに、パネリスト3名がそれぞれ専門家の立場から意見を述べ、白熱した議論がなされました。

参加者アンケートには、「自分もレジデント型研究者をめざしたい」という学生の声も寄せられ、次世代を担う若者の今後の活躍が期待される、充実したセミナーとなりました。(総務課企画室 皇甫さやか)



受賞  
「レジリアンスプロジェクト」メンバーが  
World Water Week 2012で  
Best Poster Awardを受賞

2012年8月31日、地球研の研究プロジェクト「社会・生態システムの脆弱性とレジリアンス」のメンバーが、World Water Week 2012 科学プログラム委員会が授与するBest Poster Awardを受賞しました。

この賞は、ストックホルム国際会議場で開催されたWorld Water Week 2012: Water and Food Securityにおけるポスター発表「Building farmers' resilience to food insecurity in Southern Zambia under rainfall variability」(「雨量変動下のザンビア南部州における農民の食料安全保障へ向けたレジリアンス構築」共著者：梅津千恵子、石本雄大、菅野洋光、Thamana Lekprichakul、宮奇英寿、櫻井武司、真常仁志、山内太郎)の、研究代表である梅津千恵子地

2012年度IS報告・連携FS移行・基幹FS候補発表会について

さきに行なわれたIS報告・連携FS移行・基幹FS候補発表会において発表のあった課題のうち、審査の結果下記2件が採択され10月から基幹FSとしてスタートしました。

研究課題名	責任者	所属
地球環境問題としての「食」と社会変革の可能性——グローバル化時代の食のリテラシー	末定	
アジア太平洋地域の人間環境安全保障と環境管理境界の設定——熱エネルギー・水・沿岸水産資源の連携	谷口真人	地球研教授

研究プロジェクト等主催の研究会(実施報告)

2012年8月1日~10月31日開催分

開催日	タイトル	主催(プロジェクトリーダー)	開催場所
8月1日	「水土の知」プロジェクトセミナー Structural Changes in Israeli Agriculture	渡邊紹裕	地球研セミナー室
8月2日	第3回 京都産業大学・地球研合同勉強会「配慮型社会へ——環境リスク評価と環境コミュニケーション」	京都産業大学 地球研	京都産業大学
8月3日	第18回 中国環境問題研究拠点ワークショップ・第11回 基幹FS「東アジア成熟社会」研究会 「中国雲南省における医療保障の現状に関する調査報告」	窪田順平	地球研プロジェクト研究室
8月24日	「水環境」研究会 「農地水循環を考慮した分布型水循環モデルへの低平地湛水過程の組み込み——ラオス・セパンファイ流域への適用」	門司和彦 渡邊紹裕	地球研講演室
8月27日	未来設計イニシアティブ 特別公開セミナー	基幹研究ハブ	地球研講演室
8月29日	赤井IS「環境規範と協調」第3回 研究会「実験経済学と実験哲学——環境問題への応用」	赤井研樹	地球研セミナー室
8月29日	赤井IS「環境規範と協調」第4回 研究会「実験経済学とアンケート調査の比較——食糧・環境問題への応用」	赤井研樹	地球研セミナー室
9月6日	第82回 地球研セミナー “Yaman ng Lawa” Community-based Lake Ecology Learning Centre	地球研	地球研セミナー室
9月16-17日	地域環境知プロジェクト キックオフシンポジウム	佐藤 哲	京都平安ホテル
9月25日	第83回 地球研セミナー Climate Change, Agricultural Adaptation, and Food Prices: Evidence from Israel	地球研	地球研セミナー室
10月2日	「水土の知」プロジェクトセミナー Economic Analysis of Water Management Efficiency: The Israeli Experience	渡邊紹裕	地球研セミナー室
10月9日	第1回 「食と農」基幹FS研究会	基幹研究ハブ	地球研セミナー室
10月11日	第33回 中国環境問題研究拠点研究会・第12回 東アジア成熟社会研究会 「中国における人口移動・少子高齢化およびその社会経済的影響：人口センサスと農家調査に基づいて」	窪田順平	地球研セミナー室
10月19日	同位体環境学勉強会「日本の降水同位体比と水蒸気の起源」	研究推進戦略センター	地球研セミナー室
10月27日	第4回 HDSS(Japanese Network for Health and Demographic Surveillance System) 研究会	門司和彦	地球研講演室
10月28日	第9回 全球都市全史研究会「宗教から都市を考える」	村松 伸	東京大学生産技術研究所
10月30日	大西IS「アジア・太平洋における生物文化多様性複合の解明とその未来可能性の探求」ワークショップ	大西正幸 Nathan Badenoch(京都大学 白眉プロジェクト特任准教授)	京都大学稲盛財団記念館



World Water Week 2012 閉会セッションにて、科学プログラム委員から賞状が手渡される (写真:World Water Weekより)

球研客員准教授(現、長崎大学教授)に対して授与されたものです。

賞の最終審査は、提出された650のアブストラクトの中から選ばれた60のポスターを対象に行なわれました。審査基準は、デザイン、大会テーマに沿ったコンテンツとメッセージ、科学的な裏づけ、の3点でした。とくにポスターの内容がワークショップのテーマである Rainfed production under growing rainfall variability (増大する雨量変動下の天水農業生産)に当たっていたこと、レジリアンスをザンビアの農村地域で実証研究し、レジリアンスをじっさいに計測してそれを高める戦略を提言したことが高く評価されました。

## 2012年度 科学研究費補助金一覧

2012年10月31日現在

研究種目	研究代表者	研究課題名
基盤研究 A(一般)	秋道智彌	「関係価値」概念の導入による生態系サービスの再編
	門司和彦	* ラオス全土水質マップ作成による地域ジオ/エコヘルス研究の推進
基盤研究 A(海外)	奥宮清人	西ニューギニア地域における神経変性疾患の実態に関する縦断的研究
	田中 樹	* アフロ・ユーラシア貧困地域での生業多様化と安定化に向けた水平技術移転の実践的展開
	長田俊樹	南アジア諸言語の類型論的研究 — 南アジア言語領域論の再検討
基盤研究 B(一般)	佐藤洋一郎	新疆ウイグル自治区小河基遺跡の学際的調査による砂漠化過程の解明
	関野 樹	時間基盤研究情報の蓄積と提供の試み — 新たな時空間解析環境の構築
	梅津千恵子	環境変動に対する農村地域の対処戦略とレジリアンスに関する研究
	酒井章子	ボルネオ低地フタバギキ林における植物 — 送粉者ネットワーク構造とその生成要因
基盤研究 B(海外)	佐藤洋一郎	アフロユーラシアにおける初期農耕・牧畜文化の比較研究
	酒井章子	オオバギ(トウダイグサ科)と花序で繁殖するヒメハナカメムシの送粉共生の起源
基盤研究 C	石山 俊	アフリカ半乾燥地域社会の複合的「なりわい」とその現代的特質に関する研究
	大西正幸	**バイツィ語 — 南ブーゲンヴィルの危機に瀕する言語の記述研究
	佐藤 哲	コロンビア川流域における環境アイコンを活用した地域環境の保全と活用プロセスの研究
	石川智士	**カンボジアの区画漁業権停止が資源管理と小規模漁業に与える影響調査
	田中 樹	*在生産業創成による社会的弱者層支援と資源・生態系保全の両立に向けた実践的地域支援
挑戦的萌芽研究	谷口真人	**桜の開花に及ぼす地下温暖化の影響評価
	中野孝教	*津波塩水化プロセスの解明を起点とした水質診断ネットワークの創出
	中村 亮	*資源利用と管理に着目したスワヒリ海村の環境・生活影響評価と多民族共存の比較研究
若手研究 B	福土由紀	*現代中国における農村医療・衛生事業に関する歴史研究
	小坂康之	*照葉樹林帯における外来植物の分布拡大と地域に適した植物資源保全に関する研究
	西本 太	*開発と人口変動 — ラオス中南部農村地域50年の比較
	蔭 宏偉	*外部主導による開発への地域住民の「適応」: 南中国及び周辺地域における調査研究
	半藤逸樹	**「地球の限界(化学汚染)」定量化に向けた統合的環境リスク評価手法のデザイン
	熊澤輝一	*オントロジーを用いた地域づくりにおける知識継承・移転支援システムの構築
	内藤大輔	*熱帯アジアにおける市場誘導型自然資源管理に関する比較研究
	岩崎慎平	汽水湖漁業にみるコモンスの生成と流域環境ガバナンスへの射程
特別研究員奨励費	加藤裕美	在来生業を考慮した開発プロジェクトの実現可能性 — マレーシア先住民社会の事例研究
	日下宗一郎	*安定同位体分析を用いた縄文時代人の食性と社会組織の解明

\*は新規 \*\*は学術研究助成基金助成金

### 招へい外国人研究者の紹介

**WANG Keng**  
王 铿  
ワン・ケン



- 所属 中国環境問題研究拠点
- 招へい期間 2012年10月1日～2013年3月31日
- 現職 北京大学歴史学部准教授
- 専門分野 中国史

**MOLINA, Victorio Bolanos**  
モリーナ・ヴィクトリオ・ボラノス



- 所属プロジェクト 東南アジアにおける持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計
- 招へい期間 2012年4月1日～2012年6月30日 および11月5日～2013年2月20日
- 現職 フィリピン大学マニラ校 医学部公衆衛生学科学科長
- 専門分野 公衆衛生学

**FEDOROV, Alexander**  
フョードロフ・アレキサンダー



- 所属プロジェクト 温暖化するシベリアの自然と人 — 水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応
- 招へい期間 2012年11月1日～2013年1月31日
- 現職 ロシア科学アカデミー永久凍土研究所・研究室長
- 専門分野 凍土学

## 2012年度 受託研究費

2012年10月31日現在

区分	委託元	研究代表者	課題名等
先端計測分析技術・機器開発事業	(独) 科学技術振興機構	川崎昌博	世界標準をめざした光学的二酸化炭素自動測定器の実用化開発
異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業	(独) 日本学術振興会	秋道智彌	日本の環境思想と地球環境問題 — 人文知からの未来への提言
地方自治体からの受託研究	静岡県	中野孝教	課題名: 富士山における水循環の解明と持続可能な地下水利用に関する研究 小課題名: 富士山地域の水循環システムの解明 研究項目名: 地下水涵養源の解明
JICAスーダン国カッサラ州基本行政サービス向上による復興支援プロジェクト	(株) 国際開発センター	縄田浩志	スーダン国カッサラ州基本行政サービス向上による復興支援プロジェクト
環境省環境研究総合推進費	東京大学(環境省再委託)	阿部健一	アジア農村地域における伝統的生物生産方式を生かした気候・生態系変動に対するレジリエンス強化戦略の構築 (サブテーマ: 生物多様性保全と調和した生物生産システムに関する研究)
文部科学省環境技術等研究開発推進事業費補助金	東京大学(文部科学省再委託)	門司和彦	気候・土地利用・人口の変化が引き起こす新たな健康リスクの予測モデル構築とその検証に関する研究基盤形成
研究開発プログラム「科学技術と社会の相互作用」	(独) 科学技術振興機構	佐藤 哲	地域主導型科学者コミュニティの創生
国際医療研究開発事業	(独) 国立国際医療研究センター	門司和彦	アジア・アフリカにおける学校保健の政策実施評価と疾病構造変遷・災害等に対応した新規戦略策定の研究
地球規模課題対応国際科学技術協力事業	(独) 科学技術振興機構	檜山哲哉	研究課題: 半乾燥地の水環境保全を目指した洪水 — 干ばつ対応農法の提案 研究題目: 広域水収支解析および小湿地の水源解析
文部科学省環境技術等研究開発推進事業費補助金	東京大学(文部科学省再委託)	川崎昌博	衛星データ等複合利用による東アジアの二酸化炭素、メタン高濃度発生源の特性解析

## イベント情報

詳しくは地球研HPをご覧ください。 <http://www.chikyu.ac.jp>

### シンポジウム

#### 告知 ランビル熱帯林研究の20年

2012年12月8日(土)  
13:00~16:45

〈京都大学稲盛財団記念館 大会議室〉 入場無料

共催：サラワク熱帯林研究コンソーシアム、京都大学総合博物館、地球研研究プロジェクト「人間活動下の生態系ネットワークの再生と崩壊」

圧倒的な生物多様性を誇るボルネオ島の熱帯雨林。その複雑な生態系の仕組みを解き明かそうと、1992年から日本人研究者がランビル国立公園で調査を行なってきました。このシンポジウムでは、20年間でなにが明らかになり、これからどのような研究が必要なのか、さまざまな分野の研究者が議論します。

#### 【基調講演】

「ランビル熱帯林研究20年史」

中静 透(東北大学大学院生命科学研究所)

「水循環を介したボルネオ島の熱帯雨林と気候の相互作用」 安成哲三

(名古屋大学地球水循環研究センター)

#### 【セッション1】

「大面積調査区を使ったランビル熱帯雨林の構造・動態研究」 伊藤 明

(大阪市立大学大学院理学研究科)

「ランビルの一斉開花研究」 酒井 章子(地球研)

「林冠の昆虫研究20年」

市岡孝朗(京都大学大学院地球環境学堂)

#### 【セッション2】

「熱帯樹木の生理生態

— 熱帯環境への適応戦略を探る」

市栄智明(高知大学農学部)

「ランビルにおける気象・水文・水質研究の

これまでとこれから」 蔵治光一郎

(東京大学大学院農学生命科学研究科)

●申込み・問い合わせ先 地球研 酒井 章子

Tel: 075-707-2302 Fax: 075-707-2507

E-mail: shokosakai@chikyu.ac.jp

### International Symposium on Future Asia

告知 2012年12月13日(木)~14日(金)  
〈地球研 講演室〉

GEC-Japan Platform は、日本の Global Environmental Change Program (IHDP, DIVERSITAS, IGBP, WCRP) のネットワーク・プラットフォームとして、地球環境変化の諸問題に関する情報交換や相互の研究協力の促進・推進を目的として、2011年に地球研によって開設されました。

今年度のプラットフォーム事業としてはGEC-Japan Workshop (2012年5月、2013年1月予定) と International Symposium on Future Asia (2012年12月) を開催します。

現在、GEC-Japan Platformを拠点にアジア全体の環境変化研究協力ネットワークへの発展をめざし、GEC-Asia Platformの設立を企画しています。それに伴い International Symposium on Future Asiaでは、GEC-Asia Platformの設立に向けての地球環境変化に関する共同研究や組織・ネットワーク、およびICSUのFuture Earthプログラムとの連携について議論します。

GEC-Japan Platformの詳細については、<http://www.chikyu.ac.jp/gec-jp/index.html> をご参照ください。

●問い合わせ先 地球研 GEC-Japan事務局  
E-mail: gec-jp@chikyu.ac.jp

### 人事異動

2012年9月30日付け

【任期満了退職】

長田俊樹(研究部教授)

内山純蔵(研究部准教授)

清水万由子

(研究推進戦略センター特任研究員(特任助教))

2012年10月1日付け

【名誉教授称号授与】

長田俊樹

2012年11月1日付け

【採用】

寺田匡宏

(研究推進戦略センター特任研究員(特任准教授))

【配置換】

佐藤 哲(研究推進戦略センター教授)→研究部教授へ



### 編集後記

地球研のある北区上賀茂では、いまが紅葉真っ盛り。本館アプローチの並木もこのとおりとてもきれいなので、毎日の通勤が楽しみです。今号から源さんに代わり、寺田さんを加えた新しいメンバーでお送りします。(編集室)

編集委員 ● 阿部健一(編集長) / 佐藤 哲 / 田中 樹 / 鞍田 崇 / 寺田匡宏 / 熊澤輝一 / 林 憲吾

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」  
隔月刊  
Humanity & Nature Newsletter No.39  
ISSN 1880-8956

発行日 2012年11月15日  
発行所 総合地球環境学研究所  
〒603-8047  
京都市北区上賀茂本山457番地の4  
電話 075-707-2100(代表)  
E-mail newsletter@chikyu.ac.jp  
URL <http://www.chikyu.ac.jp>



編集 定期刊行物編集室  
発行 研究推進戦略センター(CCPC)

制作協力 京都通信社  
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。